

第 1 回
田原市・渥美町の合併による
新市のまちづくり講演会

日 時	平成 1 6 年 9 月 2 8 日 (火)
会 場	田原文化会館文化ホール
講 師	静岡文化芸術大学副学長 文化政策学部長 上 ^{うえ} 野 ^の 征 ^{ゆき} 洋 ^{ひろ} 氏
主 催	田原市・渥美町合併協議会

合併からまちづくりへ

——浜松市の事例から田原市・渥美町の未来を考える——

【司会】 大変長らくお待たせをいたしました。ただいまから第1回田原市・渥美町の合併による新市のまちづくり講演会を開催いたします。

本日は、ご多忙の中、たくさんの皆様にご来場いただきまして、まことにありがとうございます。講演に先立ち、本日は、新市の将来を担う小学生の皆さんに「僕の夢・私の夢」という作文を発表してもらいます。当会場の地元小学校、田原市立田原中部小学校6年生の平川卓実君、河合美穂さん、よろしくお願いします。

【平川】 田原市立田原中部小学校 6年1組 平川卓実です。

【河合】 田原市立田原中部小学校 6年2組 河合美穂です。

【平川】 僕は6年1組男子の「僕の夢」の一部を発表しますので、聞いてください。

【河合】 私は6年2組女子の「私の夢」の一部を発表しますので、聞いてください。

【平川】 まず、はじめに僕の夢です。6年1組 平川卓実。

「僕は甲子園に出てかつやくし、巨人に入って、二岡選手のようなショートになりたいです。」

【河合】 次は、私の夢です。6年2組 河合美穂。

「お年寄りや、体が不自由な人を助ける仕事か、小さい病院で働いてみたい」

【平川】 次からは、友達の「僕の夢」です。

6年1組 木村一貴

「僕の将来の夢は、水泳選手です。水泳選手になっていろいろな大会で一位を取りたいです。」

【河合】 私も次からは、友達の「私の夢」です。

6年2組 河合美栄

「バスケットボールが好きだから、バスケットボールの選手になって大会などで活躍したい。」

【平川】 6年1組 能勢正樹

「ぼくは、将来お坊さんになっていろいろなところでお経を唱えたいです。」

【河合】 6年2組 藤江千菜美

「人の役に立てる仕事や、デザイナーなどの仕事をしてみたい。」

【平川】 6年1組 朽木晶宏

「ぼくの夢は、料理人になりたいです。みんなにぼくの作った食べ物で笑顔にさせたいです。」

【河合】 6年2組 伊藤彩加

「お菓子を食えることと、お菓子作りが好きなので、お菓子屋さんになりたい。」

【平川】 6年1組 田上玄理

「ぼくの夢は、医者になることです。そして、たくさんの人たちを救いたいです。」

【河合】 6年2組 鈴木翔子

「私は小さい子のめんどうを見るのが好きなので、保育士になりたい。」

【平川】 6年1組 大澤竣

「ぼくは将来マジシャンになりたい。マジシャンになってみんながビックリするマジックをしたい。」

【河合】 6年2組 木下智景

「私は映画が大好きなので、映画を作る仕事をしたい。そして、色々な国の女優さんに会いたい。」

【平川】 これ以外にも、僕たちは(私たちは)、ひとり一人いろいろな夢を持っています。

【河合】 僕たちも(私たちも)一生懸命がんばりますから、どうか一人でも多くの夢をかなうことができるような立派な町をつくってください。

【平川・河合】 お願いします。

【司会】 ありがとうございました。

続きまして、本日の主催者であります、田原市・渥美町合併協議会会長、白井孝市よりあいさつ申し上げます。

【田原市・渥美町合併協議会会長：白井孝市】 皆様、こんばんは。

今日は、ただいまかわいい子供さんが自分たちの夢を語っていただきまして、私どももご案内のように、田原市と渥美町のこれからの地域づくりの夢を持ってということで、ただいま合併協議が始まっております。

す。大変苦しみながら進めてきておりますが、ぜひなし遂げていきたいものだと、かように思っております。

そうした中、合併協議もおかげで4回ほど順調にきておりますが、ここで市民の皆様方、あるいは渥美町の住民の皆様方と、やはり合併問題、あるいはこれからのまちづくりについて、お互いに関心を高めていただくということで、今回、今月、来月にかけて3回ほど講演会を行うことになりました。今日は、その第1回を開催いたしたわけでございます。

本日の講演は、ここにございますように静岡文化芸術大学の副学長さんの上野先生でございます。

先生は、浜松地区の合併協議会の委員さんもやっておられます。そこで、合併のことでございますが、私どもこれで二度、三度のことになりますので毎年のように合併問題をやってきましたのですが、やはり年を追うごとに合併の問題、課題というものは大きくいろいろ変わってきております。きょうのこの上野先生のお話は、少し私どもが、豊橋を中心としたこの東三河地域と浜松地区、これを両方比べて見ていただきまして、合併問題が今どのようなになっているか。こちらの方は、ご案内のようにブロック別の合併を一生懸命でやっけていまして、私ども渥美半島がやっと一緒になろうとして今苦労しております。それから、豊川、宝飯の方は、今は一たん休憩になってしまいました。それから、新城、南設楽の方が合併、北設もご案内のとおり。ちょっとまとまりがまだまだ見えてこない状況になっております。

一方、浜松の方はなかなかすごいんですね。よくこれだけの方が一緒になれると思って、政令都市を目指して、来年は合併をやろうということですからずっと進んでおりますので、そうしたことは、合併問題というより、これから浜松地区と東三河地区とこの合併を通じて、今すぐは答えは出ないと思いますが、10年、20年先になってどのような、差といいますか、地域になっているのかとか、こうしたことについて皆さんに少しでもご理解を賜ろうと思ひまして、きょうは一番ふさわしい上野先生をお呼びしてお話をいただくと思う次第でございます。

また、上野先生はなかなか合併問題にお詳しい方でございますので、我々のほうに対してもいろいろまたご意見を教えていただけるのではないかと考えております。では、ご期待をいただきたいと思います。

よろしくお願いいたします。

【司会】 ありがとうございました。

それでは、講演会を始めたいと思います。

本日の講師は、現在、静岡文化芸術大学副学長、文化政策学部長としてご活躍をされております、上野征洋先生にお願いしております。プロフィール等につきましては、お手元の資料にてご案内をさせていただいておりますのでごらんください。

それでは早速、上野先生に「合併からまちづくりへ - 浜松の事例から田原市・渥美町の未来を考える - 」と題しましてご講演をいただきます。皆さん、拍手でお迎えください。(拍手)

【静岡文化芸術大学副学長・文化政策学部長：上野征洋氏】 ご紹介いただきました、上野でございます。お忙しい中、こんなにたくさんの方を前にお話しするのは大変光栄でございます。ただいま市長さんから大変丁寧なご紹介をいただきまして恐縮しております。渥美の町長さんもわざわざお運びいただきま

して。

今、袖で聞いておりまして、とてもすばらしい小学生の平川君と河合さんですか、やはりこの地域のお子さんたちがあんなにすばらしい夢を語ってくれるというのはとてもいいなと思って聞いておりました。なぜ、中日より巨人のほうの方が多いかなとか、いろいろ気になることはありましたけれども、でも、とてもかわいくてよかったなと。別に、市長さんがかわいくないと言っているわけじゃないんですけれども、まずしょっぱなで小学生の二人に敬意を表したいと思います。

それでは早速ですが、きょうの趣旨は、先ほど市長さんにお話しいただきましたので、私、簡単に自己紹介をさせていただきますと、現在、浜松市を中心に行っております「天竜川・浜名湖地域合併協議会」というのがございまして、12市町村が集まってやっております。その合併協議会の委員を1年近く前からやらせていただいております。それから、私が所属しております変な名前の大学ですが、ほとんどの方はご存じないと思いますが、最近では豊橋やこの田原の周辺からも学生がだいぶ入ってくるようになりましたが、一言だけ紹介させていただきますと、5年前に静岡県がつくりました公設民営という、ちょっと変わった大学でございまして、文化政策学部とデザイン学部という二つの学部でやっております。学長は、木村尚三郎といいまして、ご存じの方も多いかと思いますが、愛知万博の総合プロデューサーを務めております。時々テレビで変なことを言っている白髪頭のおじさんでございまして。なかなかステキな先生ではありますけれども。大変お元気な方で、もう、東大を定年でお辞めになってから10年目に私どもの大学にお見えになったものですから、もう74歳になられるんですけれども、とてもお元気で、「博覧会のプロデューサーは大変でしょう」と言いますと、74歳であれほど行動力があるかと思われるぐらい、日本中、あるいは世界中を飛び回っております。私の同僚に言わせますと、「あの先生は何を食べてるんだろう」と言っていますが、人を食って生きているそうでございまして。本人がそう言っておりますので。

それでは本題に入らせていただきます。

きょうは、おおむね3つに分けて、特に後半のほうを中心にお話ししますが、まず最初のほうで、大体合併問題とか分権型行政って、なぜこんなことになっているんだろうということを15分か20分おさらいをさせていただきます。それから、現在、私が携わっております、この政令都市を目指しております浜松の合併の現状と課題をちょっとご説明して、後半のほうは、現在、この田原市と渥美町の合併協議が進んでおられますけれども、私は、所詮外の人でございまして断片的な知識しか持ち合わせておりませんが、少し将来のまちづくりに向けまして皆様に一緒に考えていただければうれしいなと思うようなことを少しお話しさせていただこうと思っております。よろしくお願いします。

それでは、まず最初のテーマですが、私どものこの国は、現在、大きく変わりつつございます。直接の引き金になりましたのは、12～13年前になりますけれども、バブルの崩壊以降でございまして、それ以降、政府のあり方、地域社会のあり方、そういう基本的な国と地域の形を根底から変えるような動きが、特にこの4、5年顕著になっております。特に、10年前から叫ばれておりますのが、「分権型社会」というのがよく言われております。その受け皿として市町村合併を推進するというふうなことで、国会でこういった一連の法律がそろいましたのが大体1999年でございまして、それ以降、急速にこの合併、分権の動きが高まっております。

なぜ今この国の形を変えなければいけないのかというのが、大きく4つぐらいございまして。簡単に申し

上げますと、この国は今、大変な借金大国でございまして、新聞にもよく書かれておりますように、国の借金、地方の借金、それに公社・公団の借金を合わせますと1,200兆円以上になっておりまして、1,200兆円以上という、ほとんどの方が、余りにも大きな数字なのでイメージがわからないとおっしゃるんですが、1,200兆円というのは、簡単に申し上げますと、1,200兆円を人口の1億2,000万人で割れば、ぴったりに一人頭1,000万円でございます。ということは、生まれた赤ん坊から100歳のおばあちゃんまで1,000万円背負っているわけでございます。皆様ご家族が4人の方は、皆様のおうちに4,000万円の借金があるということでございます。そのくらいこの国は貧乏なんでございます。ですから、国民一人あたりに1,000万円の借金をしている国は世界中どこにもございません。ただ、日本は経済力があって、国民の預貯金が1,400兆ともいろいろ言われておりますが、もともとの経済力があるから持っているわけですし、この国際社会ではほとんどもう地位が低下しております。

もちろん、IT化の遅れなどもあるんですが、例えば日本の銀行がロンドンやニューヨークで資金を調達しようとする、ジャパンプレミアムといって、ほかよりたくさんの利息が取られてしまうとか、日本経済全体が非常に悪いと国際社会でもだめになっております。小泉さんが今、安全保障理事国になろうと一生懸命やっていますが、ああいったものに対しても、「日本は自分の国もちゃんとできないのに、ほんま、できんのかいな」みたいなことをアジアの国から言われているというようなことがございます。

もう一つは、今、政府が取り組んでおります一つの動きですが、これはNPMと書いてございますが、ニュー・パブリック・マネジメントというもので、もともとイギリスのサッチャー政権以降の行政改革のやり方で、日本語の翻訳がうまくなくて、「進行的管理」とか、あるいは「行政管理部門の合理化」などと訳されておりますが、先ほど白井市長さんとお話ししておりましたら、15年ほど前にサッチャー政権の行政改革を実際に視察なさったそうで、サッチャー政権の行政改革というのは、早い話が、公務員を大幅に削減しまして、政府の公営企業部門を民営化いたしました。ご存じの方もいらっしゃるかもしれませんが、ブリティッシュテレコム、いわゆる電話会社とか、ブリティッシュガス、ガス会社、こういった全部国営企業だったものをどんどん民営化いたしまして公務員を大幅に削りまして、それで一気に改革を進めたやり方、行政減量、小さな政府というやつですね。それをやった「鉄の女」と呼ばれたサッチャーさんですけども、サッチャー時代のイギリスというのは、もう改革の嵐が吹き荒れたというふうに言われております。こういったものを今政府が、例えば郵政民営化、そういったものの中で新しい、ニュー・パブリック・マネジメント的な考え方で行政減量をやろうというふうなことになるわけです。

あと、公共事業と行政の不信のまなざしというのが、皆さん、いわゆる一般の普通の生活をしている我々の目に見ても、どうもこの政府は本当に大丈夫かいなというのがあるわけですね。ご案内のように、今日も厚生労働省の方と社会保険庁の課長さんが逮捕されております。どうしてこう霞ヶ関のお役人さんが次々に逮捕されるんでしょうね。それから、つい2、3年前は道路公団の理事さんとか、結構偉いポジションの人がたくさん逮捕されております。それと同時に、道路公団の民営化とか、その大きな公共事業に対する不信のまなざしのようなものがありまして、特にそれを司っている国家公務員の皆さんに対して非常に不信感というのが生まれていて、どうもこの国は危ないんじゃないかと。

それから、きょうのテーマでございます平成の大合併。一応、現在の総務省が自治省時代に発表しましたのが大体3,300、それが今、100ほど減って3,200になっているんですが、落としどころは1,000だと言っ

ております。その1,000になるかどうかという問題はいろいろこれから議論があるわけですが、恐らくあと2、3年以内で半分の1,500～1,600まではいくんじゃないかというふうに言われておりますが、その背景にもいろいろ問題がございます。

簡単に申しますと、高度経済成長以降、80年代までの日本の社会というのは大量生産、大量消費というのがベースになっていたんですが、もう、物はたくさんです。皆さんの生活も十分に潤っていると思います。それから、「物から心へ」などという言葉もございますけれども、質を求めるという私たちの考え方。それから、少子化と高齢化というのは、これは非常に深刻な問題になっております。田原市や渥美町、両方とも大体20%前後ではないかと思いますが、高齢化社会が、恐らくあと10年以内には24～25%になる自治体がほとんどでございます。そういった中で、平均寿命は延びているわけですから、これからの60歳、65歳以降の人たちをどういうふうにちゃんと暮らしてもらうのか。そして、子供の数はどんどん減り続けるわけでございます。先ほどの中部小学校の方ですか、ああいったお子さんが減っていきますと、町中は中高年ばかりで、元気な子供たちがいなくなってしまう。

今、合計特殊出生率が1.29と言われておりますが、大体1.3前後。この合計特殊出生率というのは、ご案内のように女性の方が一生のうちに産むお子さんの数ですね。今、1.29まで下がってきたわけですが、東京都内の23区ではただの0.9、0.88なんていうところがあります。ということは、もう1人を切っているということなんですね。

子供の数が減るということはどんな感じかというのをもうちょっと具体的に申しますと、大体1.3ぐらいで推移いたしますと、日本の人口は現在、統計計算上は1年間に60万人減ります。60万人減るということは、1億2,000万から60万ずつ減っていくわけです。そうすると、100年たちますとちょうど人口が半分になります。日本の国は、100年前にやはり6,000万人でした。明治の終わりから大正の初めが6,000万人、今が1億2,000万人。ですから、100年かかって1億2,000万人になって、これから100年かかって6,000万人に戻るわけですね。だから、この島国の狭いところに6,000万ぐらいでちょうどいいじゃないかというふうな人口学者もいますけれども、でも、考えてください。中高年ばかり多くて子供の少ない6,000万人なんて嫌ですね。きょうは女性の方がたくさんいらっしゃいますけれども、ぜひ3人以上は育てていただきたいというふうに思うわけです。

あと、市民意識、納税者意識の高まりということで、特にここ10年ぐらい、一般市民の方でも、それから市民グループやNPOなどでも、やはり自分の税金の使い道には提案をしようとか、手を挙げようとか、声を出そうとかいう人たちがふえております。やっぱりそういった人たちが地域社会を動かすような時代に変ってきた。

それから、IT化といいますか、「ネチズン」という変な言葉ですけども、ネットワーク・シチズンといいまして、いわゆる市民同士の連帯をインターネットとか電子メールではかりながら新しい市民活動をやっていくような人たち、こういった人たちがどんどん増えてくる時代になった。

そういう意味で、さまざまな国の経済問題とか合併問題とか、そういったものの背景にこの社会の成熟化がある。だから、成熟するということは、もう伸び盛りの国ではなくて、成熟した社会というのは、伸びよりも質、あるいは私たちの経済的な成長よりは生活の質というものを大事にする時代だと。その中で、やはり合併とかまちづくりを考えていかなければいけないというふうなことでございます。

二つ目のテーマが、中央集権と分権型行政の違いを簡単に申し上げます。

中央集権というのは、簡単にいいますと全体性、画一性、公平性の行政スタイルをいいます。一方、分権型というのは、主体性が発揮されること。全体性というのは日本中どこでも同じということです。それから、地域の個性は、その地域にしかない独特のあり方を考える。画一性というのは、金太郎飴と言われますが、どこを切っても同じやり方。それから、行政と住民の協働によってその分権型行政を進めようと言いますが、中央集権では公平性という名でさまざまな公共事業が同じように展開されることで肥大化してまいります。そういった意味では、中央集権というのは霞ヶ関の人たちにとっての効率のいい行政システム、分権型行政というのは、自立した政策と執行が求められるやり方だと。

これは、私がこういうふうに言っているわけではないんです。これは、1998年に出されました政府の分権行政推進会議のその冒頭の前書きに、これまでは全体性、画一性、公平性だった。これからは、主体性、地域の個性、住民と行政の協働でやらなければ、もう日本の国は立ち行かないというようなことが書かれているわけでございます。

今のお話をもうちょっと中央集権のやり方というものをポイントだけ言いますと、中央から地方、市町村に、仕事の内容とやり方は国が決める。従わないと補助金がもらえない。従えば、借金しても地方債の発行とか、後で面倒をみってくれる、いわゆる地方交付税、交付金ですね。あと、地方の自立的な行政運営を阻害して国への依存を高める。そのために事業の是非を考えるインセンティブがないものですから画一的な自治体運営になって、地方の借金もふえ、国の借金もふえるという、こういう構造になっていたということです。一言でいいますと、「仕事と金のワンセット方式」と言われております。

これからの分権型行政は、「仕事と金は自己完結型」と言われています。今までの中央の中に組み込まれているのではなくて、中央は中央、県は県、市町村はそれなりに効率的な行政サービスを提供するには、政策と財政の双方を自己決定する仕組みというのがあります。よく「地域の自己決定」という言葉が出ますが、これが必要であります。そのためその歳出面では国と地方の事業分担を明確にする。地方の行政運営を阻む国のコントロールを廃止するということが課題です。そして、歳入サイドでは自主財源、これが一番大きな問題で、これからの自治体はいかに自前の財源を持つかが非常に重要になってくる。あと、地方格差是正の仕組みをつくるということで今議論されています。

こういうのは、行政学の授業みたいで面白くないので先へいきたいと思います。

今求められているのは何かというと、今申し上げた三つのコマをまとめますと、一つは、住民ニーズにこたえる独自の政策形成というのが自治体に求められているわけです。これは、田原市であれば田原市の住民の人々の主体性が発揮できるような、当然のことながらきょうは市議会の方もいらっしゃるかもしれませんが、議員さんというのは住民の代表でありますから、そういった意味でさまざまな政策を提言されるときに、やはり住民のニーズを踏まえた主体性というのをよくお考えになっていただきたいなということでございます。

二つ目が、住民と行政の協働の仕組みづくり。とにかく行政にお任せという時代でもなくなって、住民が勝手なことをやっても効果は上がりませんから、住民と行政の協働の仕組みづくりというようなことを考える。

三つ目が、地域ビジョン。合併した後、どういう町なのか。ここが一番大事なんですね。また後でお話

しします。

こういったことをやっていくために全体として自主財源を自前の執行ができるような形にしていかなければいけないねということになります。

今、合併問題でよく言われていますのは、初めに合併ありきではないかということで、合併特例法による駆け込みではないかと。現在の特例法は、来年の3月までに申請すればいいことになっているわけですが、そういう時期の問題も最初と少しずれてまいりまして、それからもう一つは全体性、要するに、国は画一的ではないと言いながら合併手法の国の指導のやり方がちょっと余りにも画一的ではないかということで、専門家の間では国の指導の仕方が、アメとムチ方式だとよく言われるわけです。

もう一つの大きなテーマは、コミュニティの連帯感というのがよく言われます。違う町が一緒になって大丈夫なのというようなことで、特に、後でお話ししますが、浜松を中心にした12市町村というのは、生活圏が全く違います。直線距離にして、同じ市内に行くのに70キロもかかるんですね。だから、市の職員がこれから市内に出張するときは一泊どまりで行くなんて言っておりますから、だから、そういう巨大な合併をやると、大丈夫かいなというのがあるわけです。

それから、金、すなわち行政効率以外に住民が納得できる理由はということで、よく言われます温度差の問題というのがあります。これも後でまたまとめてお話をいたします。

次に、将来にツケを残すんじゃないかという、その不透明性の問題がございます。ビジョンがしっかりして、計画がしっかりしていないと、地域の姿がよく見えない。だから、ビジョンと計画をはっきりさせようねということが一つ。

それから、2番目と3番目は裏表の関係で、箱物をつくる自治体が多いんですね。でも、この間、渥美町も田原市内もくまなく自分で歩き回って見せていただきました。非常にいいですね。もう箱物は要りませんね。ほとんど完璧というぐらいそろっていますね。あと、この間、事務局の方にお伺いしたら、合併特例債を使って小中学校の耐震化をやらねばとおっしゃっていましたが、そういったことには大いにお金を使っていたきたいんですねけれども、もう非常にすばらしい公共施設が多いなと。ですから、これは一般論として申し上げておきます。不透明性という問題が叫ばれております。

以上が大体その合併を取り巻く問題点で、これを簡単にまとめますと、大体このアメとムチの問題、それから、町村の生き残りを、旧自治省、現在の総務省は、ああだこうだ言って、いろいろなことでアドバイスをするときに半分脅かししたりするんですね。

それから二つ目が、自治体の間の温度差、それから行政と住民。その行政の場合には議会とか首長さんとかいろいろなレベルがあるですけれども、そういった温度差のダブルバインド。ダブルバインドというのは、二重の頸木（くびき）といいますか、こっちを立てればあっちが立たずといいますか、そういった問題があると。

あと、不透明性の問題では、やっぱり住民の人たちが納得できる地域ビジョンというのが、今、合併をやっている自治体のほとんどに十分描けていないという課題があります。そして、こういう図ができるわけございまして、今最大の合併をめぐる議論は大体こういうふうに集約されております。アメとムチの問題をどういうふうに克服するのか、温度差の問題を克服するのか。今、現状で合併がいろいろ動いておりますけれども、この温度差とアメとムチを乗り越えたところに地域ビジョンというものをきちんと描き

切ったところがいい合併になるだろうと。ということは、この二つの課題を乗り越えて、これを土台にここをどうやってつくり上げて、どうやって実現していくかということに尽きるというのが、現在、これはあらゆる合併の地域で問われている問題でございます。

以上が合併問題に関するおさらいでございます、ちょっと駆け足でしたけれども、次に、私が先ほどちょっと申し上げました浜松市の合併の状況をご説明申し上げます。

この政令市浜松へのあゆみということで、現在、平成15年の9月からちょうど1年になりましたけれども、12市町村による天竜川・浜名湖協議会が発足しました。その中身ですが、実は、これは合併協議会が本格化する前の歴史なんです、2年ちょっと前に環浜名湖政令都市構想というのを浜松市長が発表しております。実は、その1年ほど前に地元の経済同友会の代表幹事何人かが集まって提案を行っております。環浜名湖というのは、これはお気づきかもしれませんが、浜名湖の周りをぐるりと回るという意味でございますが、合併しないさいよということで経済同友会が提案しております、実は、現在、この経済同友会の代表をやっておられるのが豊橋に本社があります中部ガスなんです。中部ガスの社長の中村さんは、実は、中部ガスというのは、本社は豊橋ですが、事業体の半分は浜松で事業をなさっていますので、中部ガスの社長さんの中村さんが中心になって提案をしています。

その後、環浜名湖政令都市構想研究会というのが出まして、このときには10市町村の予定だったんです。ところが、いきなり16市町村が参加して、特に北遠と呼ばれます遠州の北、天竜とか、春野町とか、水窪町とか、龍山村、そういったところがどっと入ってきて、いきなり16市町村の研究会ができたわけです。そして、8カ月間ぐらいもめました。そして、15年の6月になりまして、法定合併協議会設置準備会がここでつくられました。このときに、ずっとこの研究会に参加していた湖西市、これはもう、皆さんお近くなのでご存じだと思いますが、田原市から隣の隣がもう湖西市ですね。豊橋を抜けるとすぐ湖西。それから、新居町。この二つが15年6月に、ちょっとやめたと言ってこの準備会から抜けます。最初、16市町村あったんですが、最終的に昨年9月に天竜川・浜名湖地域合併協議会ができたときは、3市9町村。3市というのは、浜松市、浜北市、天竜市の3つでございます。湖西が抜けました。湖西と新居が抜けたために、この「環」という字がなくなりました。だから、知恵の輪みたいなもので、環ではなくなってしまったんですね。ですから、「環」がなくなって、天竜川・浜名湖地域と。

ご案内のように、湖西市というのは田原市にとってもよく似ていますけれども、工業生産高が高くて財政力指数のすごくいいところでございます。それと、湖西はちょうど浜松と豊橋をつなぐ位置にありますので、湖西市の議員さんの一部には豊橋と合併したいということで、この間、湖西の方のお話を聞きましたら、「豊橋と合併して田原と合併すれば、おれたちは日本一だ」と言っていましたよ。だから、すごいなと。湖西というのは田原にすごく似ていて、ものすごく財政がいいんですよ。それと、非常に地域の構造が似ていまして、そういう意味では、湖西の悪口を言う方は、あそこは日和見だというんですけども、むしろそうではなくて、あそこの市長さんなんかいろいろな新聞で発表していますけれども、決してこの会合、この都市構想研究から抜けたときに、単純にそういう日和見ではなくて、市民の意見を考えてみたらまとめ切れないと。まとめ切れないまま合併協議に入るのはとても無理があるのではということもおっしゃっていました。ですから、そういう意味で、昨年の9月から、ちょうど1年前ですが、正式な法定協議会が出たということでございます。

通常、政令市を目指す場合はどういう手続かという、これはもう当り前のことで、別に覚えていただく必要はないんですが、法定合併協議会があって、合併協議会だから協議・調整で、合併協定書の調印が今の予定では11月に予定されています。ですから、今はここに来ているわけですね。それで、これを各議会で議決しまして、ですから、1カ月ぐらい遅れまして知事へいく。これがいろいろな事情で7月1日に延びました。これは、協議会のホームページから写したので、ついこの間、これは17年7月に延びております。

その延びた理由は幾つか理由があるんですが、一番最大の表向きの理由は、12市町村のコンピュータシステムを一遍に結ぶのに相当大変だということがわかったということで、東京や大阪からコンピュータシステムのプロを何人も招いている研究してもらったんですが非常に難しいということで、ちょっと余裕をみたほうがいいだろうというふうなのが一応理由になっております。正式には、裏のほうでは、ぐちゃぐちゃ言った市町村があるんですけれどもね。ですから、あんなにぐちゃぐちゃ言うんだったら少し様子を見ようかで延ばしちゃったのもあって、延ばせ、延ばせと言ったところもある。

それで新市が誕生して政令市へというのが、これが後ほどご説明しますが、平成19年に政令市になる予定で進めております。

ここに書いてありますが、平成17年度に12市町村による合併、それから19年度に政令指定都市へ移行すると。ここが現在の浜松市でございまして、隣に雄踏という小さな町、ここが浜名湖でございまして。そして、浜名湖のここが湖西になるわけですね。ですから、湖西とこの小さいこの辺が新居です。ですから、この二つが抜けましたためにこの浜名湖のぐもりがなくなって、「環」が取れちゃったと。あとここにございまして三ヶ日町、細江町、引佐町、浜北市、天竜市、龍山村、春野町、佐久間町、水窪町と。これはすごいですね。何かもう、全体がヘチマみたいなものでしてね。この水窪のこの辺はもう長野県でございまして。ここは長野県ですね。ここは愛知県ですね。ここは奥三河のほうになります。そして、ここに豊橋でございまして、この船のあたりに田原市があるわけなんですけれども、要するに地続きでこうなっております。

ですから、これはえらい合併になる。当初の合併構想はこれだけだったんですね。北遠は入っていませんでした。天竜から北は、こちら側といくか、こちら側といくかでもめていましたら、どどどどとこっちへ来て、ここからここまでが南北約70キロございます。左右が一番広いところで28キロぐらい。ですから、大体縦横が3倍ぐらいの差がありまして、この青いのが東海道新幹線と東海道線ですね。そして、このもう一つ青い鉄道が、これがいわゆる天浜線と言われる天竜浜名湖鉄道で掛川のほうへ行っている。それから、この縦にはしっているのが遠州鉄道で、天竜まで行っております。あとはもうこの辺は全部バスしかないので、この三遠南信道というのが計画されているんですが、これはなかなかできませんが、一応浜松や三ヶ日、引佐も含めまして佐久間も水窪も、この三遠南信の活性化というのに長らく取り組んでおりまして、東三河地域研究センターなどにもいろいろお世話になっているんですが、この辺の将来のビジョンというのを今から数年前それぞれの町で一応取り組んでおります。ですから、将来的には三遠南信をぐるりと考えた場合、田原市は、ある意味でここの三角形の底辺の拠点になる可能性もあるわけですね。そういうちょっと夢のような話はまた後でさせていただきます。

では、その浜松市はどんなことをやっているのかということをお話しします。

12市町村の合併のコンセプトは、「環境と共生するクラスター型政令指定都市」ということで、スローガンが「水と緑と光の中で新しい産業と文化がはぐくまれる国際都市を目指して」と。一言では言えないですね。なぜ言えないかというと、ありそうなものを全部入れちゃったからなんですね。あれも入れなきゃ、これも入れなきゃって。当然、北遠の方は水と緑が大事でして、それから光も大事です。それから、新しい産業というのは、もともとヤマハとかスズキとか大企業があるんですが、それに加えて、光産業。文化というのは、国際ピアノコンクールとか音楽都市を標榜しております。それでそういう国際都市を目指す。クラスターというのは「ブドウの房」という意味でございます。

ご案内のように、このマークがいかに妥協の産物かとわかるかと思うんですが、この房の数がしっかり12個になっているところがみそでございます。ですから、これが1個でも減ると大問題になるわけです。これは、最初のイメージでは対等合併のイメージを出しているわけですが、対等合併ではないんです。編入合併なんですけれども、この対等のイメージを出そうというので、ブドウの房状に12個の丸を並べた。考え方としては、地域の豊かな自然環境と市民主体の活発な経済・文化・社会活動が共生する都市というのを目指しております。

では、どんなことが問題なのかということで幾つか申し上げますと、新しい浜松市を取り巻く環境変化。この合併をやりますと、再来年に政令指定都市を目指します。そうすると、問題は、政令都市というのは、政令都市になる条件というのがいろいろありまして、中心市街地がちゃんとしているとか、交通網が整備されているかですね。人口だけあってもだめなんですね。今は人口要件は緩和されて、7～8年前までは人口100万が目途だったんですが、どんどん下がっておりまして、千葉市が政令市になり、さいたま市がなり、あの辺から80万でいいよと。ついに最近は、合併特例ならば70万でいいよというようなことで、実は静岡県はこの浜松以外に静岡市と清水市が合併して、既に政令市の申請を行っております。早ければ来年、政令市に移行する。ですから、この浜松市を中心にした政令市は静岡県内では2つ目の政令市になります。そうしますと、その新しい町の可能性と交流・発展のチャンスという時に、新しいタイプの政令市を目指すためには、その自立した政策やまちづくりができる、それから、これまでのプラスアルファみたいなものを考えなければだめなんです。これが、どっちかという総務省から宿題になっているんです。

そこでいろいろ考えたんですね。では、そのマクロの環境変化がいろいろありますねと。一つは、世界規模のエネルギーの問題とか情報、こういったものがいろいろあると。きょうもニューヨークでは史上最高値ですね。1バレル50ドル以上ついています。これは、世界中がもうこんなにガソリン高になりますと自動車産業にも影響します。ですから、ブッシュの戦略が当たったという人がいます。あのブッシュさんは、テキサスの石油屋さんの元締めですから、これだけ石油が高くなると石油屋さんは儲かるんですね。ところが、経済はガタガタになる可能性があります。あと、先ほど申しました日本における問題としては、少子高齢化とか、成熟化とか、産業構造とか、金融資金に変化があります。それから、行財政システムでは、国から地方へ、官から民へと大きな流れ。この大きな流れに対して政策課題を5つに絞りました。

これは、政令市になるまでに取り組むことということで、新しい社会システムの構築ということで、これは後でもちょっと出てきますが、要するに、エコロジーとエコノミーを基軸にした社会システム。例えば、環境共生型でございますとか循環社会型と言いますが、そういったものを次の産業と一緒にあわせて

つくっていかうと。地域経済の再生、新産業の創出というのは、さっきちょっと申しました光産業というのに最近注目しておりまして、浜松はスズキ、ヤマハによるオートバイ産業とか楽器産業があるんですが、それに加えて光産業というのは、浜松ホトニクスというところと、現在、国立の浜松医科大学という大学がございますが、そこが組んで光システムを使った治療検査機器の開発とか、そういったことを盛んにやっております。

それから3つ目は、都市機能の再生ということで、この2、3年の間に浜松市を訪れた方はご存じかもしれませんが、駅前の東地区を約40ヘクタールぐらいにわたって全部更地にして、もう一回ビルを建て直して再開発をしております。そこを中心にもう一回都市機能を再構成しようということと、それと、中心市街地がやはり商業集積で、ご存じの方は少ないかもしれませんが、実は、3年前に老舗の松菱というデパートが倒産いたしまして、いまだにその跡がもめております。そういったデパートの倒産。8年ぐらい前、浜松の町中には西武百貨店、松菱百貨店、PARKO、遠州百貨店と、デパートが4つあったんですよ。今は1つしかないんです。そのぐらい商業の人たちはみんな逃げ出しちゃったわけです。そのためにもう一回町中を全部つくり直す作業をしております。松菱のビルも今年からもう取り壊しが始まって、再来年には新しいビルに生まれ変わります。

それから、地域としての自主自立の必要という、これは財源の問題と政策の問題です。政令市になりますと、いちいちもう県は指導してくれませんか、勝手にやれということで、あとは国と直接交渉しなければなりません。そうなりますと、やはり自主性と自立性が問われるわけでございます。

それからもう一つは、先ほども触れましたけれども、官民協働システムですね。やはり現在の住民のパワーあるいは住民の知恵というものは、行政があなどれないほど大きな力を持っています。それから、現在、浜松市内にはまちづくり団体でも20ほどありまして、それぞれ非常に活発な提案をしております。

そういった意味で、新しい提案を住民や民間から入れて、もっと活性化するための仕組みをつくろうというのが現在の浜松市の政策課題としてこの5つに絞られています。

こういう話もあんまり面白くないので、次に面白い話をしましょう。

これは、新聞社がまとめた浜松市の合併後の規模なんですね。人口は80万ちょっと超しそうなんですけど、実際には79万で15位になっています。面積は、何と日本で一番大きい町になってしまうんですね。1,511平方キロメートルあります。これに続くのが北海道の足寄です。静岡も清水と合併して今は広いです。あとは、前から大きい、大きいと言われたいわき市というのが大きかったんですけども、ところが、この面積なんですけど、実は北海道の合併が進んでいまして、浜松市が1位なのは数カ月で終わると言われておりまして、これより大きいのが北海道で合併してしまうそうです。

あと、ここで見ていただきたいのが、この農業産出高です。ここに皆さん親しみのある渥美町とか田原市が並んでいます。浜松の周辺が、今、浜松だけで約300ちょいあるんですね。320ぐらいだと思います。12市町村全部束ねますと548億円で、一応1位になっているんですね。これは来年の7月ですからもうあり得ないですね。その前に渥美町と田原市が合併すると770億円になるわけですね。そうすると、この12市町村はベケになりまして、この渥美・田原連合軍が日本でダントツの農業産出高になります。ですから、新しい町は770億円あるわけですから、これは豊橋の538億円をはるかに抜きさってダントツの日本一です。ですから、一次地帯で700億円もの農業産出ができるのはこの田原市と渥美町しかないんです。ですから

すごいですね。ここはダントツの日本一です。

次に、製造品出荷高で、これはご案内のようにトヨタがダントツなんですが、あとはもう大阪、横浜、川崎、名古屋と、これは全部巨大な政令市ですよ。トヨタさんの豊田市ですから、ここはずば抜けているわけですが、田原市は現在、1兆8,000億～1兆9,000億というふうに聞いております。そうしますと、後でまた出てきますけれども、全国規模で14位ぐらいではないかと言われておりますが、浜松が今2兆5,320億で、全国で一自治体としては大体8番目ぐらいにランクされると聞いております。ですから、また新生田原がどうなるかの話はまた後でさせていただきます。

あと、これは卸売・小売業で、いわゆる商業レベルですね。商業のほうは、大阪、名古屋、福岡という巨大都市ばかりで、12市町村を浜松が全部束ねても大体全国16位ぐらいにランクされるというふうに言われています。

こうやって見ますと、後ほどこの田原のことを考えるときに、この農業産出高と製造品出荷高にちょっと注目して考えてみたいなというふうに思っております。

ちょっと浜松の話を手短かにまとめておきます。

ご案内のように、合併協議の中には基本4項目というのがありまして、合併の方式、期日、名称、市役所の位置、これをまず決めろということになっておりまして、これは、浜松市が残りの11市町村を全部編入いたします。編入で決定しております。それから、合併の期日は、当初は17年4月の予定だったんですが、7月に延びて、来年の7月。それから、編入ですので、新市の名称はもう自動的に「浜松市」。一応これも公募しようといって、住民から公募したんですけれども、結局、浜松市以外の住民から「浜松市がいい」という票が多かったんですね。というのはなぜかというと、ありていに言えば「早く浜松市になりたいよ」と言っているわけですね。でも、議員さんと首長さんは「なりたくない」と言っていたんですね。そこでやっぱりいろいろ問題がありまして、それで全部決着がついたわけですが、結局すんなり「浜松市」になりました。そして、市役所の位置も現在の市役所。ここまでが基本要件で、あとは議員さんの定数。議員さんが、ちょっとここで詳しく書きませんでしたが、12市町村集めると219名ということになります。219名で議会ができるかということ、毎日こんな感じですね。ですから、219名で議会はできなだろうと。実際に、四国や九州のほうで100人以上で議会をやっている所はありますけれどもね。ですから、やはりさすがにそれはできない。それから、住民団体が幾つと、とんでもないと。合併特例の任期の後とはとんでもないといって出しておりまして、最終的には合併後の政令市の法定の枠をいっぱいにして、56で決着がついています。ですから、編入ですから、浜松市の議員さんは大半は生き残るんですが、浜松市でも、それでも1割強は減りますね。それであと各市町村の議員さんがそれぞれ平均して2人ずつぐらいいる勘定になりますか。そうしますと、大体56になります。

ですから、219名が一挙に56になるものですから、このぐらい規模が大きいと何がいいのかというと、議員の方には大変申しわけないんですけれども、議員さんのお給料で何億円も浮くんですね、これが。ですから、住民はその56でいいかと。でも、一部の住民団体が40まで減らせと。ぎりぎりまで減らせと言ったので、さすがに何人かの議長さんが怒って、やっぱり56ということになりました。ですから、特例による任期延長は使えません。それから、都市内分権と地域組織、区割りの問題がこれもちょっといろいろもめていまして、これは後ほどちらっと申し上げます。あと、職員の身分や待遇、こういった問題が当然のこ

とながら通常の合併としてあるわけです。

今出た区割りというのはどんなふうにするのかというと、地域自治組織を置く目的としては、都市内分権。要するに、最近「小さな政府」という言葉がありますが、これは要するに、小さな市役所、大きな区役所というやつですね。そういうふうにとしよう。この田原市の場合も、新しい市の形になっても、やはり旧赤羽根の役場や旧渥美の役場というのはそれなりのその地域のヘッドクォーター的な役割というのはどうしても果たしていかざるを得ないでしょうけれども、同じようなことで、その地域の住民自治の強化、それから住民の声をどうやって反映させていくのか、それから、市民協働を推進。これが地域自治組織を置く。地域自治組織には事務所、これは、浜松の場合は、天竜、春野、佐久間、水窪、旧市町村を一つの単位にしております。ですから、合併してもこの自治区の数、今、浜松市の人口は60万人で極端に多いものですから、ここを3つに割って、ですからこういうふうにする。この区割りの問題は、議員さんの後々の選挙区の問題にもなるものですから、いろいろ問題がありまして、例えばこの浜北というところは、現在、浜北市なんですけれども、浜北の市長さんと議長さんが断固頑張って、浜北市は絶対分割は認めないと言ったものですから、浜北だけがわりと人口が多くて、ここは独立した地域協議会になっております。あとはみんな自治区で、この辺ですと人口は5,000とか3,000ぐらいになりますけれども、ここだけはちょっと大きくなっております。

では、住民はどう思っているんだということで、これは今年の6月でしたか、合併をもう一回、12市町村から住民を抽出してアンケートをとりまして、まず、合併に期待するもの。合併はどんどんやってくれ、こんなことを気をつけてねというのが、「行財政の効率化が図られる」31.1%、「公共施設の有効活用ができる」25.7%、「地域経済が活性化する」24.4%、「行政サービスが向上する」22.4%。これは3つまでの複数回答ですから合わせて100%になるわけではないんですが、問題は、要するに「合併の効果なんか期待していないよ」という方が、やっぱり27.5%あるということなんです。

では、一方、不安。「合併嫌だ」、「何かまずいね」という人はどうか。「住民負担が今より高くなる」。これは水道料金の問題ですとか、いろいろあるわけですね。12市町村もありますと、もう凸凹でございます。1対1の合併ならここで調整しようやということもできますけれども、もう、とてもそんなことはやっている暇はない。あと、「住民の意見が届きにくくなる」。大きな町になると住民の意見を聞いてもらえなくなるのではないかというふうな不安を持っている人がかなりいる。あと「一部の地域のみが発展するのではないか」と。特に田原・渥美の場合はそんなこともないんですが、先ほど地図を見ていただきましたけれども、同じ市内で70キロ離れていますと、それはもう格差がないと言うほうが嘘になってしまいますので、やっぱりその現実をどう受けとめれるかという問題があるわけです。それから、「行政サービスが低下するのではないか」、「役所などが遠くなって不便になるから嫌だ」というふうな意見を書いた方がこのくらいいたというふうなことで、そんなには多くないんですけれども。

では、どんな政策を新しい市はやればいいのかという問いに対しては、この6項目の中から2つ選択した。一番多かったのが、やっぱり「自然環境との共生を図るまちづくり」をやれと。それから、「産業の活性化を図ってほしい」。この2つは非常にポイントが高かったですね。やはり、多くの市民がそう思っていると。3つ目が「市民主体のまちづくりを進めてほしい」と。これもそこそこ多いわけです。あと「相互補完による魅力あるまちづくり」。相互補完というのは、例えば行政と民間企業と、それから住民とか、

そういうお互いの役割を補完するまちづくりをやってほしいと。行政と住民の協働とか。あと、「分権型のまちづくりで、あまり国の補助金をあてにしないで独自のまちづくりの形成の仕方をやるべきだ」というのに丸をつけた人が結構いました。

それから、これはちょっと何だろうと思う方のためにご説明します。「世界都市の実現」という変なのがあるんですけども、これは、実をいうと今の浜松市長さんの当選したときのスローガンが、「技術と文化の世界都市」というんです。これは現在の市長さんのスローガンなんですが、ほとんど否決に近かったんですね。市長が今2期目なんですけれども、4年間掲げてきて、北脇さんはとてもいい市長さんなんです。だけれども、彼のスローガンは全然うけませんで、結局、これは新しい市では使われないということになってしましまして、そんな事情もございます。

以上が浜松の現在の合併の状況でございます。

最後に、今申し上げたことをまとめますと、今後の課題としては、政令市の要件をクリアする。人口の問題。人口は、70万以上でいいよと言われていまして、おおむね80万になりますので大丈夫だろうと。問題は商業集積。倒産したままのデパートをどうするんだとか、いろいろな問題があって、中心市街地活性化委員会というのを今やっております。あと都市機能。これは交通の問題なんかも含めて。それから、インフラ整備は、浜松市のところはいいんですけれども、周りの三ヶ日とか細江とか春野町になりますと、いろいろ上下水道の問題とか、さまざまなインフラ整備の問題を至急やらなければいけないところが幾らもある。

それからあとは住民の一体感の問題です。交流の仕方をどうするのか、ビジョンの共有。ありていに申しまして、うちの学生に静岡県の大きな地図を広げて、「浜松市と今度合併する水窪町ってどこにあるか」って指差させたら、5人のうち4人が間違えるんですね。ということは、合併する相手がどこにあるかも知らないという、とんでもない合併なんです。だから、あまりにもエリアが広いものですから、浜松市民が正確に春野町とか水窪町を指差せないんですね。ですから、やっぱり希薄なんです。ですから、そういう12市町村全部を交流させなければいけないという、そのビジョンをどうするかという問題。

あと、3つ目が産業の活性化で、中心市街地の商業の問題がありますから、これを分散して、浜北市とか、天竜市とか、三ヶ日のほうとかにいろいろ商業集積をつくりながら発展させていく。あとは工業の問題。それから農林水産業はもちろんです。水産業はあれですが、天竜とか北遠がありますと林業が非常に盛んなものですから、今、浜松市を中心の農業と北遠中心の林業を合わせてどういう展開をしようかということが課題になっております。現在は、大きなこの3つ、細かく挙げれば10ぐらいになるのですが、その具体化を急いでいるということでございます。

以上が浜松市の状況でございまして、次に、きょうの本題にちょっと入りたいと思いますが、冒頭に書いてございます渥美半島の共生と半島全体の将来のまちづくりというのは、私が書いたのではなくて、実はこの間、田原市役所からいただいた『広報たはら』の合併臨時特集号の1ページ目に書いてあった言葉でございまして、皆様の言葉です。きれいですね、この博物館とか、サイクリングロード。これを見ながら、私は、いいところだなあと思って、田原市は非常に裕福な、指数的にはいい町なのでいいなあとうらやましがっておりましたら、田原市役所の方や、先ほど市長さんから、そんなにいいことばかりじゃないよと言われましたので、皆さんと一緒に考えたいと思います。

これまでの経緯を私なりにおさらいしたので、これは2年前の話なので、もう別に見ていただく必要はありません。問題は、これからの渥美町を考えるわけなんですが、わざわざ古い話をちょっと持ち出しましたのは、田原市と渥美町の合併はこのまま順調にいくと思います。だけれども、一回いろいろなことで過去を振り返っておいたほうが、将来、さまざまな行動や活動があったときに、よりハードルを低くできるのではないかと。私どもの学長の木村尚三郎という男が5年ほど前に書いた本のタイトルが、「振り返れば未来」というんですよね。ですから、過去を振り返ると必ずそこから未来がよく見えてくるから、一応過去を点検しましょうねというふうなことでございまして、簡単に終わらせます。

2年前のことを私なりにいろいろ資料をいただいて調べてみたんですが、市名の問題とか、議員さんの問題とか、タイムリミットの問題があったなということがいろいろわかりました。ところが、今、渥美町でこの春に行われた住民投票は、投票率全体が75%、住民の4人に3人ですね。その中のまたさらに85%の方が田原市との編入合併に賛成、反対している方が15%と、随分変わったなあと。それで、6月の町議会では16対1で合併推進というのを、いろいろニュースやなんかで見させていただきました。

そこから学ぶことなんですが、結局いろいろなこと、例えば、住民の意識、議員さんの意識、町長さんの意識、やっぱりそれぞれの温度差というのがあるかないか、一度きちんと点検した方がよろしいのではないかなと。当時は、同小異無だったのが、同小同無への努力は万全だったのか、それから、ビジョンの共有、理解、それから、全体としてちょっと早過ぎた春だったのではないかなという感想を持っております。

早過ぎた春とは何かということではちょっと簡単に申し上げますと、一つは、2年前までというのは、県内に合併の例ってないんですね。ですから、モデルなき合併というのはいろいろな疑心暗鬼を生んでしまうわけですね。ですから、2年前の3町の合併協議は県内最先端でおやりになったわけです。ところが、やっぱり不調に終わったときに、その奥にあるものは何だったんだろうというふうに考えたときに、やはり最先端をいくということは、非常にいいことのようにでありながら、心理的な不安とか、十分に関係者同士の話し合いや根回しができなかったというようなことも含めて、タイムリミットに対しては、諸刃の剣といえますか、いい面と悪い面の両方があったんだと。特に、県内や国内では、まだ合併というのは今ほど高まっておりません。ですから、まだいいのではとか、まだそんなに急ぐことはないよとか、そういうことも心理的な要因としてあると思うんですね。それから3つ目に「見えない未来より現在の安心」というのがありまして、これは浜松市の合併にも同じことが言われています。ですから、この間、新居町の町議会さんがちょっと言っていましたけれども、要するに、先々が見えないときには今のままでいいよというふうな心理が働くわけですね。そういった心理が働いてだめになった合併もございします。

そういったことで、心理とか、気持ちの問題とか、気運の成熟とか、そういったことも合併をうまく進めるために重要ですよということを一言だけ申し上げておきます。

今は田原市と渥美町の合併、大変だなあと思って、私、よその人間なものですから、つい余計なことで、ちょっとお疲れじゃないですかというので、すいませんね、余計なことを言って。要するに、あんまり合併の話をしたり合併疲れしてしまうと、もう3回目ですから、「何だよ、もう、またかよ」なんていう議員さんもいらっしゃるのかなと。住民の方も、「まあ、いいじゃん、前のとおりやれば」とか、そういうのがあるわけですね。それから、渥美町との合併で何をやるか。「じゃ、今、田原市はこの間、赤羽根と

合併したばかりじゃない。もう今のままでいいよ。じゃ、渥美町と合併して何が変わるの」って言う人たちだっているわけです。ですから、渥美町との合併で何が変わるのかという新しいビジョンを市民の皆さんにはやっぱりよく考えていただきたい。

では、住民として田原の人たちと渥美の人たちの一体化というのは、だから、やっぱりそれは、もう田原市は、かつての田原町ではなくて、赤羽根と一緒になってもう田原市として既に歩んでいるわけですから、やっぱり合併をして新しくなった以上、さらに渥美町と一緒になろうというのであれば、当然規模の大きな田原市側が渥美町を歓迎するという、そういう気持ちを持って、そんな、手を挙げて抱きつけということではないんですけれども、やはり一緒になろうねという気持ちを出していただきたい。

そんなことを考えて、では、その個別の問題を少し考えてみたらどうなるかなと。

例えば、これから先と一緒に考えていただく場合にどんなことが問題なのかなということですが、1つは、合併はもう3回目で大変だよというお話なんです。実をいうと、あと2回、3回やってくる可能性がないわけではないんです。例えば、県内東部、東三河の大合併をという構想を持っている首長さんもいるんですね。例えば、田原・渥美が一緒になったら、次に豊橋を中心に豊川とか、場合によっては奥三河の方まで考えてしまおうというようなケースもあり得るわけです。そうすると、すぐではありませんが、3年後、5年後にはもう一回合併協議会、またその先に合併協議会。ですから、合併疲れしている場合ではないですよということで、例えば、大合併もありえます。こうなりますと今度は、豊橋を中心にした政令市で、70万規模になりますから政令市へ。そうすると、政令市になるとここはどうなるかということ、政令市になった場合、政令都市東三河市というのが万一できたら、例えばここは、さっき浜松でお示したように、田原区とか、渥美半島区とかになって、区になってしまうんですね。そうすると、その区がどういうパワーを持てるかというのが今度は課題になっていくわけです。ですから、そういうマクロに見た場合、将来もっと恐いことがいっぱい来ますという、まあ、オオカミ少年みたいですけども。

あと、道州制になるとどうか。道州制になると、さっき湖西市が浜松から抜けた話をしましたけれども、湖西市は、豊橋との合併を考えています。湖西市は静岡県ですが、豊橋市は愛知県ですね。ですから、湖西の市会議員さんで堂々と「うちは道州制になった途端に豊橋と合併するからね」と言う市会議員さんがおります。ということは、道州制になったらどうなるかといったときに、湖西が豊橋と合併して、さらに浜松と合併して、そこに東海を中心都市をつくらうということになったときに、当然この田原市も一緒にやりましょうよということになれば、一挙に150万から160万の都市ができてしまうんです。今、浜松中心のところが80万ちょっとです。豊橋を中心にした東三河合併、もし、これが起こるとやっぱり70万強になります。両方合わせると150～160万ですね。今、両方ともくっつかないで入っていない湖西と新居が当然入ってきますから、大合併で東海を中心都市になってしまうかもしれない。そうすると、大体合併で150万から160万の人口になるだろうと言われている。

こんなになるのはうんと先ですよ。来年、再来年の話ではないわけです。だけれども、まちづくりとか町のあり方というのは非常に長期的なビジョンが必要ですから、10年後、20年後のことを考えたときに、この町というのはこういう可能性があるなということも、行政の方とか議員の方は当然こういったことを念頭に置いておられる方もいらっしゃるでしょうけれども、ですから、合併も3回目ですけども、実は、あと2回、3回やって来る可能性もありますということで、広い目で見ると、当面の合併問題だけを見

るのとでは大分見え方が違ってまいりますという問題がございます。

2 番目に、渥美町と田原市が合併すると何が変わるのかということで、いろいろ先ほど浜松市のところで農業産出額とか製品出荷高のデータを見ていただきました。新しい田原市は農業産出高はダントツで、全国第 1 位ですね。これは、田原市だけで福井県、福井県は県全部合わせても農業産出高は700億いかないですね。六百数十億ですね。奈良県も同じくらいです。ですから、一つの県をゆうに超えるぐらいのダントツの第 1 位になるわけです。すごいですね。だから、農業日本一というのはもうわかりました。

ところが、もう一つ、製品出荷高を見ますと、これは14位で、規模からいうと札幌や埼玉は現在 1 兆 9,000億近くありますが、札幌の出荷高は8,000億ぐらいしかありません。埼玉もそんなものです。9,000億ぐらいかな。ですから、政令市の倍以上の出荷高を持つ工業都市になります。第14位というのは幾つかの政令市をはるかに上回ります。

ところが、14位なんです、実際に人口当たりで割ってみると、これは日本一なんです。まさかと思っているじゃないですか。本当ですよ。合併後が 6 万6,000ですよ。6 万6,000の人たちで約 1 兆9,000億ぐらいを頭割りにする数字と、現在、日本でダントツと言われているのが豊田市でございます。豊田市は 9 兆をやや超えています、あそこは今、豊田・加茂合併で40万都市になりますね。一昨年の数字なので、ですから、数字が変わると動きますけれども、ほぼ田原市は豊田市と並んで、人口当たりの出荷高は日本一になります。ですから、今はダントツで豊田が 1 位なんです、田原と、あちらの加茂の合併とか全部データを見てみましたが、ほとんど遜色ないですね。

そうなりますと、農業でも工業でも人口当たりではダントツの日本一ですよ。こんな市は、日本中でないです。だから、農業生産高も工業生産高も人口当たりでダントツで日本一という市はないんですよ。皆さんはすばらしい市に住んでおられるということをご理解いただきたい。浜松市が逆立ちしたって勝てない状況なんですね。

ですから、そういう意味では、この先合併すれば、大体、渥美町と合併することで農業産出高はダントツの 1 位になるわけですね。工業の方は、現在の田原市だけがもうほとんど90%以上占めるわけですが、それでもやはり今後、トータルな工業力というのは上がっていくだろうと。そういった意味で、多分田原市は近い将来、「東海の星」とか「小さな巨人」。これはすごいですよ。だって、工業生産高と農業、両方でダントツで 1 位になれる市はないですから。これは、両方合わせて「巨人の星」ではないですよ。間違えないでください。

3 つ目の課題、田原市民と渥美町民の一体化。これは先ほどご覧いただいた今の渥美町の方の住民の調査です。これは、7 月に行われました田原市民のアンケート調査の結果を合併ニュースに書いてあったのをちょっと私の方で勝手にグラフにさせていただきました。そうすると、「時代のすう勢であり、進めるべき」という方が15%です。それから、「渥美半島の将来を考えればやむを得ない」と答えた方が約44%。ちょっと端数は四捨五入していますので。それから、「渥美半島の将来を考えても進めるべきでない」というのが11%。「いずれにせよ進めるべきでない」というのが23%。「わからない」が 6 %。

私はちょっと気になったんですよ。これは「進めるべき」が15%で、「まあ、いいんじゃないの」というのを入れて大体60%ですね。それから、「進めるべきでない」「いずれにせよやめるべきだ」、これを合わせますと34%ぐらいあるんですね。おやっと思ったんですが、こちらは進めたい人が 8 割、こちらは

反対している人。やっぱりこっちは多いんだなと。いろいろな広報紙とか今までの資料をいただいてちょっと読んでいたんですが、やっぱりこの落差を埋める必要があるなと思っています。これは心の問題、気持ちの問題なんですよ。だから、渥美半島全体、渥美半島の将来というのは何かということを考えることで、この落差は変わるんじゃないかなと。ですから、私はここのところが結構今当面の課題として一番大事なのかなというふうにちょっと気になっております。これを何とかしたいなというふうに思うんですが、ここから先、皆さん一緒に考えていただきたいと思うんですが、現在、この間いただいた前回の合併協議会だよりをいただいて読ませていただいたんですが、やはり、目指すべき姿というのが、その「うるおいと活力のある田園共生都市」ということで、ここに「ガーデンシティ」という、とてもおしゃれな名前がついております。ガーデンシティというのは、ご案内のように、ガーデンシティを売り物にしているのは、例えば、シンガポールという都市国家がありますし、それから、ロンドン郊外には、かつてガーデンシティというコンセプトでつくられた非常に緑豊かな素晴らしい田園地帯がございますが、私は、そのイメージがあって、ああ、すてきなビジョンだなというふうに思っているんですね。

やはり、大切なことは、この「うるおいと活力」というのは具体的に何をイメージされたのか、これは工業力なのかなと。こっちの「うるおい」は自然環境のことなのか、農業のことなのか、いろいろ含まれているんだろうなと思ったんですが、合併で新田原市には2つの日本一、農業生産日本一、工業生産日本一、製品出荷高も人口当たりでは日本一を手に入れました。もう一つは、この合併によって日本一の渥美半島を愛する6万6,000人というのをやっぱりつくっていただきたい。要するに、合併ではなくて、田原市ではなくて、渥美町ではなくて、この半島にやっぱり共に生きる仲間というふうな、そういう仲間なんだという気運をつくっていただけないかなというふうに思うわけです。

そこで、最後にその共生（ともいき）という考え方、これは田園共生都市の「共生」をそのままいただいているんですが、別の読み方で「ともいき」というふうにも読みまして、共生（ともいき）という考え方もありますので、そんなことを幾つか紹介しながら少しまとめたなと思っていますんですが、まず一つは、まちづくり。きょうは、合併協議をきっかけに将来の渥美半島の姿あるいは田原市の姿というものを考えていこうと。そういうときに、まちづくりってだれがするかというと、やっぱり人なんですね。人というのはどういう人というときに、まず大きくは、よく言われますのは、この市民、それから行政、それから農業・商工業者と書いてございますが、一般には産業界というふうには呼ばれるんですね。大体行政学の教科書にはそんなことが書いてあるんですが、これを考えて、この田原市と渥美町は特に農業者の方が多いですし、大きく楕円形で書いた3つを結ぶのが基本形で、今度は、その楕円形をつなぐ役割、例えば、行政と農業・商工業者の間では、商工会であるとか、JAとか、そういう団体を通じてさまざまな形での調整機能が図られたり協力が行われたりしているわけでございます。一方、市民と行政の間では、議会、すなわち議員さんたちですね。議員さんは、市民の代表ではありますが、行政の監視役でもあります。その場合、議員さんが議員さんの持つ市民に対する代表制、それから、行政に対する監視力、あるいは政策をつくる政策形成力、そういったものが重要になってくるわけですね。

ですから、きょうも何人の方が市議会の方がお見えになっていると聞いておりますけれども、その議員の皆さんにお願いしたいのは、やはりその市民に対する代表制の問題。大抵議員さんとお話していると、「私が住民の代表で議会へ出ております」とおっしゃるんです。それは大変結構です。ただ、ご自分の考

えを全面的に出して自分が代表だという方がいらっしゃれば、自分の仲間、住民、自分の地域の人たちがこういう考え方から自分はこうしたい、自分の個人的な思いとは違うけれども住民の代表としてこういう提案をしたいというふうな議員さんもいらっしゃるわけですね。ですから、代表制とは何かということ一度お考えいただきたいなと思うんですね。代表制というのは、議会に選挙で選ばれた以上、自分が代表なんだから、自分の考えでいくんだという代表制、そうじゃなくて、自分が選挙で選ばれたからこそ、選挙で選んだ人たちの気持ちをどれだけ酌み取れるのかという代表制、すなわち、自分の個人的な考えは横へ置いてでも地域住民の代表を務めるんだという代表制、そういった代表制を考えていただきたいですね。

これは、私がその浜松の合併協議会などでいろいろな議員さんとか議長さんとお話していると、おやっと思うことがあるわけですね。「自分は議長だ」とか、「自分は議員だ」とか言って発言されるんですけども、「それは個人のご意見ですか」、「それともおたくの町の住民の意見ですか」と言うと、大抵返事をなさらないんですよ。「両方だ」とおっしゃるんですね。でも、言い方を聞いていると、個人の意見を「町のみながそう言っている」とおっしゃるんですね。これは私、非常にまずいと思いました。案の定、その町では住民アンケートをとったらその議長さんと違う結果が出てしまいました。

だから、やはり議員さんというのはだれを代表しているのか。やっぱり住民なんですよ。だから、そういうことのないようにということで、私は協議会へ行って余計なことをつい言って、もっぱらあちこちの議長さんに恨みを買っておりますけれども、だけど、しょうがないです。それはやっぱり考えてもらわないと困るんですから。やっぱりそういう痛みも辛いことも、いろんなことをやって乗り越えないと。僕は、議会の活動、議員さんの思いというのは大変だと思いますよ。まことにご苦労さまだと思います。けれども、これはやっぱり一回乗り越えないと、合併の向こうにまちづくりが見えるかといったときに、やはりそういったこれからの政策を決めていくのは首長さんと議員さんがわりと大きいわけです。もちろん行政の人たち、市役所の職員が一生懸命頑張りますけれども、だけど、最終決定はやっぱり議会で予算を決めたりいろいろなことをしなければいけない。そういうときに、私は議員の皆さんに、皆さんが一人一人の市民の代表をどういう形で務められているのか、それをぜひお願いしますということがまず1点目でございます。

2番目に、市民とこういう生産者、商業者、農業者、これに最近はNPOとか市民グループというのがあちこちの町で活躍するようになりました。これは何も流行ではございませんで、いわばいろいろな職業を持ちながら一市民として、先ほど冒頭でネットワークシチズンとか言いましたけれども、やはりその納税者意識とか、そういった意識が高まってまいりますと、一市民として行政に意見を言いたい、あるいは一市民としてまちづくりに提案したい、そういった人たちがどんどんふえてくるわけですね。それから、これから循環型とか環境共生型という場合にはこういう人たちの果たしている役割はかなり大きいんですね。浜松などでも環境問題とか、そういうリサイクルの問題なども行政に市民を非常にあてにしている部分も強い。

それから、浜松市はちょっと変わった町でして、2年ほど前からユニバーサルデザインというのを政策の基本にしているんですね。ユニバーサルデザインというのは、ご案内の方もいらっしゃるかもしれませんが、バリアフリーを一步進めまして、高齢者も体の弱い弱者も子供も妊娠中の女性の方も、そういう人

たちすべてにとって使いやすい町、あるいは使いやすい公共施設、それから使いやすい小中学校ということで、現在、主な小中学校はすべて車いすで出入りできるようになっております。

私、さっきこの市民会館に来て一番最初に驚いたのは、ここのトイレはユニバーサルデザインのおトイレですね。すばらしいトイレがついております。ここのおトイレお使いになられています、皆さん。きょう帰りにぜひトイレへ寄ってってください。いや、実際にいいトイレだなと思いました。ちゃんとユニバーサルシートといって、あれは大体昔は女性用のトイレのところに赤ちゃんのおむつ替え台とか、いろんなあいうものがついていたんですけれども、男性用トイレに実に見事につくってありますね。

私は、この間から田原の町をいろいろ見させていただいて、3つか4つびっくりしたことや感動したことがあります。ちょっと余談ですけども、一番最初に驚いたのは、この間、「めっくんはうす」というところに行ったんですよ。そしたら、おばちゃんであふれていたんですね。休日ですよ。「何があったの。何かイベントやっているんですか」と言ったら、「違う」と言うんですね。「メロンの大安売りをやっている」と言っているんですね。私も買いましたけれども、すごいですね。メロン安いんですね、本当に。あんなのでメロン農家の人は大丈夫かなと思うぐらい安いんですね。三つも買いましたよ。そしたら、その町の人がいっぱいしゃべっているんで、あそこで見ていたんですね。あの中をずっと見たら、ちょうど1年前の合併のときにつくった、田原市という子供の顔がいっぱい出ているポスターを皆さんご記憶ですか。あれがいまだに大事に貼ってあるのは「めっくんはうす」だけでした。でも、あれはいいポスターだから、私はそのポスターの写真を撮りながら、じいっとポスターを見て、ああ、かわいい子だなと思って、実際に子供たちの表情が生き生きしていましたね。先ほど出てくれた二人の小学生もそうなんです、ああ、やっぱり子供たちの笑顔というのが、これは合併のシンボルに使われたんだなと思いました。

「めっくんはうす」の話に戻しますと、一番びっくりしたのは、あそこは市の施設というよりは、道の駅としてつくられていますので、その向こうにちょっと見たら、余りにも立派な建物があるので、「あれは何ですか」と言ったら「病院」と。あれはすごい病院ですね。近くに寄ってちょっと見てまいりました。それから、福祉センターがその「めっくんはうす」からこの市役所のほうへ来る途中にありました。大体ずっと見ていまして、ここのところも見させていただいて、ここは中へ入ったのは初めてで、外側はこの間見て、すばらしい施設が多いですね。

さっきのユニバーサルデザインの話は、なぜそういう話をしたかといいますと、それは全部市民の提案でつくったんです。ですから、今、浜松の中心市街地はすべてに車いすで行けるようになっています。中心市街地の公共施設は全部、視覚障害者や歩行障害を持つ人の案内と、それから、中心市街地の信号にはすべて南北が「ぴよぴよ」、東西が「ぴっぴっ」かな、その2種類の南北の横断歩道と東西の横断歩道には音を変えて、目の見えない人が渡れるようになっております。一度お暇な折に、今、中心市街地でやっているそのユニバーサルデザインのまちづくりをごらんいただくとわかるんですけれども、とにかく、別に障害者のためにではないんですよ、高齢者のために、それから、子供たちのために。ユニバーサルということは、別に道路や町を車いすで歩けるようにしましょうということではないんですね。国境や性別を超えてということで、ご存じかもしれませんが、浜松というのは日系ブラジル人がとても多いところなんです。今、2万数千人と言われております。住民登録している方が1万9,000とか2万ぐらいですか。すごいでしょう。大体渥美町の全町民と同じぐらいの日系ブラジル人がいるんですよ。ですから、市役所の看

板はポルトガル語で書いてございます。市役所に入ると、まず日本語があって、ポルトガル語があって、それから下に小さく中国語とかハングル語がついております。これを称して市長さんは「国際都市」と言っているんですが、それはちょっと違うんじゃないかなと。でも、すごいですよ。町の道路標識も大体大きなものは全部ポルトガル語がついております。それから、市の公共施設も全部、出口とか入り口とかトイレというのは全部ポルトガル語がついております。ですから、それは他文化共生都市なんです。要するに、肌の色が違おうが、言葉が違おうが、でも、同じ人間じゃないの、一緒に暮らそうよ、かわりに税金払ってと、これだけのことなんですね。でも、それでいいじゃないかと言っているわけです。

そういう人たちがどこに勤めているかというと、ヤマハやスズキの関係会社の子会社の労働者になっている人が一番多いんですね。当然トヨタ系の会社もありますけれども。そういったところで働く人にはちゃんと住民登録をしてもらって、普通の浜松市立小学校に日系ブラジル人の子供たちがたくさん入学しています。面白いですね、作文コンクールとか絵画コンクールに出ると、例えば、山田セルジオ君とか、そういう名前が新聞にわあっと出てくるわけです。もう全然子供たちもみんな違和感がないです。ですから、町中にブラジル系の人がいっぱい歩いていますし、何が一番いいかといって、あのサンバがすごいですね。お祭りのとき必ず出てくるんですね。おへそ丸出しなんでちょっと恐いですがけれども、だけど、すごい勢いでやってくれる。そして、すごい町のにぎわいになる。

だから、そういうふうに市民が提案して市民がやるまちづくりというのは、もちろん田原や渥美でもなさっているかもしれませんが、わりと今、大きな町では主流になっています。ですから、市民が提案して、公共施設をこういうふうに変えようとか、市民が提案して、今度の学校の補強はこういうふうにしてくださいと。特にお母さんたちが子供たちを守るために、小学校のユニバーサルデザイン化であるとか、それから、プールをつくる時はこういうふうにしてくれとか、いろいろな注文がきます。それはやっぱり、市民の皆さんの提案とか知識とか動きがないと、なかなかそれが道路一つとっても、学校一つとってもまちづくりに十分生かされない。そして、完成してしまってから、ああ、あれをやればよかった、これをやればよかったという話になってしまうんですね。だから、やはりこれからのまちづくりにはこういった人たちのパワーが必要だということですね。

それからあと、先ほど申しました田原市と渥美町はもう圧倒的な農業王国で、それから商業者、工業者の方がいらっしゃる。こういった人たちが行政と連携しながらまちづくりを進めていくためには、やはりその商工会が商工業者の皆さんの意見をちゃんと反映させるような提案をしていく。また、ＪＡがどんどん行政に対しても、例えば農業者というのは、今、最大の問題はいろいろ後継者の問題でありますとか、それから、農業産品の付加価値の問題とかいろいろありますけれども、そういったものを行政もまた強力にバックアップしながら進めていく。そうなりますと、当然そういった役割からまちづくりにそういった商工会やＪＡがどういう役割を果たせるのか。こういった中間団体といいますか、こういうピラミッド型の三角形に対する逆三角形の連携というのが結構これからのまちづくりには重要ではないかというふうに言われております。

そこで申し上げたいのは、それぞれの使命。では、皆さんの使命は何ですかということなんですね。特にこういう人たちはわりとミッションオリエンテッドといいますか、自分たちの団体やグループの目標をわりとはっきり掲げます。ところが、こういうところは、いや、商業振興ですよとか、いや、私たちは

農業者の生活の安定ですよおっしゃるんですけども、それだけではなくて、もっと中身に入ればまちづくりに行き着くわけですね。ですから、それぞれの使命、それぞれの役割、それぞれのパワーを合併からまちづくりに生かしている。ということは、それぞれ市民の一人一人、あるいは市民のグループで、農業者、商工業者の方、商工会、JAの方、行政で働く人たち、議員さん、それがそれぞれの思いをまちづくりのところに一つに集めていかないと、まちづくりというのはうまくいかないわけですね。だから、何か行政が図面を書いて、議会が承認して、ほいって工事が進んで何か建物ができればいいという、そういうまちづくりの時代はもう10年前に終わってしまっていて、こういう人たちの提案や知識がどれだけここに生かされるか。それによって、そういう新しい道路一本、プール一個、小学校一つにとっても、町中がその小学校を大事にしていく、町中がその美術館を大事にしていくような構造が生まれてくるわけですね。

ですから、現在既に公共施設としては、デイサービスセンターとか、福祉センターとか、田原市も渥美町も立派な施設をお持ちです。渥美町の役場ってすごいですね。僕、見に行ってみてびっくりしました。すごい立派な建物だなと思って。すぐその隣に歴史資料館でしたっけ、あれね。ただ、こんなことを言うと、渥美の町長さんを目の前にしてまずいんだけど、あそこねえ、僕行ったときに、あの坂道って大した坂道じゃないんですけど、ご年配の人が自転車を押したり荷物持ったりしていると結構ぜいぜいって、途中で休んでいるんですよ。あそこはちょっと小高くなっていて、ご年配の人は車がないと辛いんですね。だから、ああ、いいのかなあと思って見ていたんですけども、でも、あれを見て安心しました。ああ、合併しても、もう公共投資は要らないなと思ったんですけどね。あとはいかに市民の生活レベルのものを充実させるかです。

ですから、このまちづくりを結論的に申し上げるとこういうことになるということで、まず今日お集まりの皆さんにも、じゃ、自分は何なんだ、自分は何を考えればいいのかみたいなことを、それぞれの使命と役割とパワーをお考えいただきたいと。これは私からのお願いです。

最後に、少し幾つかまとめてお話ししたいと思います。

この写真は、渥美町のホームページから借りてきました。最後にちゃんとクレジット入れましたから…。

まず、まちづくりというのは、簡単に言えば地域を愛する人づくりなんですね。だから、人が育たないところのまちづくりってみんな成功しないんです。ですから、まちづくりの成功というと非常に効率的な投資でありますとか、非常にすぐれたコンサル入れてうまくやったとか、そういう話を稀に聞くことがあるんですが、それだけではありません。そうじゃない。原点にやっぱり町を愛する人がいないところでは、まちづくりというのは大体成功しないんですね。だから、私はあえて、くどいようですが、そのまちづくりの原点は人づくりなんだということで、どういう人づくりをするのかというふうに考えていただきたい。

それから二つ目に、やっぱり、じゃ、町に何のためにどうしてほしいですかということ、ほとんどの方が「安心なまち」「安全なまち」ということをおっしゃるんですね。安心なまちというのは、特に福祉とか、安心した老後が送れるとか、安心して子供が育てられるとか、やっぱりそういう心理的なものを含めて、福祉とか、教育とか、住民の生活全般の問題。安全のほうは、セキュリティーも含めまして、災害に強いまちとか、そういったことがよく叫ばれるわけですが、結局のところ、じゃ、そういうまちづくりをどうやってやろうかというときには、やはり行政と住民の共同がないとうまくいかないわけですね。ですから、先ほど申し上げましたように、住民の提案を受けとめる行政、あるいはそれを一緒になって考える議員さ

ん、それを一生懸命またバックアップしていく中間団体、市民グループとか」Aとか、そういった人たちのコラボレーション、共同というものがちゃんと機能しないとうまくいかないということですね。

それから、じゃ、共同するためにどうなのかということで、先ほど「共生（ともいき）」ということ为先ほどちらっと申し上げました。ともに生きる、すなわち経済的な問題もあればさまざまな心理的な問題もある。じゃ、同じ渥美半島で一緒に生きていこうね、あるいは、同じ田原市民として力を合わせていこうねというときに、先ほど申しましたミッション、使命と役割というのが非常に大事になってくるわけですね。お互いにどういう役割を果たせばちゃんとつくれるか。人と人というのは同じじゃないですね。だから、おれがやっているのに、あいつはやってくれないとか、いろいろ愚痴が出たりするわけですね。そういうのじゃなくて、自分と相手は違うんだから、自分のできることはやってあげたい、あの人はあれができるけどあれができない、だから、お互いのいいところ、悪いところを相互補完しないと実は本当のコラボレーションにならないわけですね。

ところが、これは合併も同じなんですよ。合併というのは、はっきり言えばお見合いみたいなものです。あるいは結婚みたいなものですから、やっぱりイギリスの有名な詩人が言っておりますが、結婚する前は両目を開けてよく見ろというんですね。結婚したら片目をつぶれというんですね。これが長く続く秘訣だというんですけれども、これは大事なことでして、市民がお互いにきちんと見つめ合って、お互いの役割はこうだねと。でも、一緒に暮らし始めたら、ちょっとした失敗なんかは片目をつぶって、よし、頑張ろうねというってやっていくような、そういう「共生（ともいき）」の精神みたいなものを地域社会できちんと育てていかないと、去年でしたか、北九州市に市長さんとちょっと話す機会があって、あそこは末吉さんというとてもない建設省出身の頑張り屋のおじさんなんですけれども、もう今度4期だか5期目になっています。彼が言っていましたけれども、北九州市というのは今から約35年前に門司、戸畑、若松、小倉という5つの市が合併して政令市になったわけですね。でも、5つの都市が合併したばかりに、この町の一体感をつくるのに25年かかったと言いました。そして、彼が市長になったときにはまだ一体感はなかったと。自分が30周年事業をやったときに、ああ、やっこの町も一つになったなという実感を初めて持ったというんですね。彼が市長になってからもう7、8年後にそれが行われて、今は35周年が終わって、もうじき40周年になるわけですね。ということは、本当の町の一体感というのは、北九州の市長さんに言わせれば30年かかるよということなんです。でも、小倉とか八幡とか門司というのは、それなりに昔から一国一城の主同士でしたから、いろいろ、「おれが」、「おれが」というのがあるんですけれども、この渥美半島のところはそうではなくて、もう半島全体としての一体感が生活圏としてあるわけですから、あとは気持ちの問題ですよ。ですから、そういう意味での「共生（ともいき）」というのを大事にしていきたいなと思っております。

大事なことは、未来を考えるということでまちづくりをやる。未来はだれのためにあるかというと、残念ながら皆さんのためにあるのではなくて、本当は皆さんのお子さんとかお孫さんのためにあるんじゃないですか。皆さんが頑張れるのは、やっぱりいい子育てをしたいとか、それから子供たちの質問にちゃんと答えてあげたい。さっきの小学生二人、最後に何て言いました。「私たちも頑張ります。いい町をつくってください」と言いましたね。あれは、明らかにここにいる市長さん、町長さん、我々を含めての脅迫状ですよ（笑）。だから、やっぱりあれには答えなければいけない。だから、ここにいる人たちは子供

の脅迫に答えられるかという問題があるわけです。だから、まちづくりとか、合併とかというのはすべて未来のためにあるわけですよ。皆さんだって、あしたがあると思うから、きょうちょっと忙しいけど、この市民会館で何かアホな先生の話でも聞いてみようかという気になるわけでしょう。あした大地震でこの町はつぶれますよと言ったら、ここにはだれもいませんよね。だから、未来がまだあると信じているからみんなあしたのことが考えられるわけですよ。

昔、わりと僕の好きなアウグスチヌスという哲学者がいるんですけども、この人は、哲学者と言うと偉そうですけども、中世の神学者です。もとは女郎屋の用心棒をやっていたとんでもない男なんですけれども、一念発起して30歳ぐらいから修道院へ入って大哲学者になったんですが、彼が自分で告白しているんですね。「昔、おれはさんざん女を騙して悪いことをやってきた」と。その大哲学者が書いているんですけども、「未来はどこから来るか」と書いてあるんですね。人間は、生きている間しかもの考えることはできない。過去というのはもう、自分の記憶のある範囲だけは過去なんだと。現在は一瞬にして通り過ぎる。未来というのはどこから来るかと。「期待があるところだけに未来が生まれる」というんですよ。とてもいい言葉だと思って僕は大好きなんです。

皆さん、この合併に期待していますか。このまちづくりに、田原の将来に期待しているでしょう。ならば未来はあるんですよ。でも、すべての市民が「合併に何も期待していないよ」、「田原の市、まちづくりなんか期待していないよ」と言ったら、もう合併もまちづくりもこの町の将来も消えていくわけですよ。

田原市は、全国でも稀に見るぐらい豊かな町です。さっき市長さんにそう言ったら叱られました。「そうじゃない、課題山積なんだ。三位一体改革でますます補助金もなくなる」って。まあ、確かにおっしゃるとおりなんです。だけれども、そうじゃなくて、それを突き破ってでもこの町の豊かさを市民一人一人のものにしていくには、やっぱりお互いが期待しなければだめなんです。だから、田原市民の皆さんは、渥美町の町民の皆さんに期待してあげてください。

それから、もう来年には一緒になるわけですから、一緒になったら自分たち同士で、仲間同士でお互いに期待し合いましょう。期待することで未来があるわけです。だから、期待すると人間のコミュニケーション能力が上がりますから、お互いに期待し合うと話し合いが生まれて、コラボレーションとかネットワークにつながっていく。お互いに期待しないと言葉数が減ってしまうんですよ。よく言うでしょう「あんなやつ、口もききたくない」とかね。だから、嫌なやつとはしゃべらないですよ。いいやつとしゃべりたがるんです。だから、ご婦人は子育てが始まるとお子さんとばかり喋るんですよ。旦那とはしゃべらないんです。旦那は過去で子供は未来だから（笑）。だから、みんなもう振り返りたくないんですよ。

というわけで、きょうの話は、過去を忘れて未来をつくりましょうという話でございますから、どうぞおうちへ帰って、ご夫婦仲良く会話をしてください。会話のないところには未来はございません。（拍手）どうも失礼しました。

【司会】 どうもありがとうございました。

それでは、せっかくの機会でございますので、ここで質疑の時間を設けたいと思います。上野先生にお聞きしたいことがございましたら、挙手をもってお願いいたします。

【上野】

私、ちょっと早口でべらべら言っちゃったんで、おまえの話はようわからんとか、こちら辺をもう一回説明しろとか、そういうご質問でも結構でございますから何でもどうぞ。

【司会】

はい、どうぞ。

【質問者 A】

シュトウと申します。日本一のお話ございましたけれども、これのメリットというのは具体的に言うとうどういうことになるんでしょうか。

【上野】

メリットは、私が申し上げるまでなく、皆さん一人一人がそれなりに考えていただくのが一番いいんですが、一つは、この町は大変な税収がございます。特に法人税でございますけれども。そういう意味では、市の財政が安定して、例えば、小学校、中学校などの建設や運営、福祉などに回るお金というのは十分に、工業生産高がそれだけあるということはメリットがございます。農業生産高も同様で、この町の農産物は、やはり愛知県の代表のみならず、日本の田原としてさまざまな形で外へ出ていきますから、それがひるがえってフィードバックされることで工業生産も農業生産も市民の誇りにならなければ僕は意味がないと思うんです。市民の皆さん一人一人が、農業者の方は、おれは日本一の農業を担っているんだと。働いている方は、おれは日本一の農業出荷高を担うんだというふうな気持ちを持っていたきたいということです。結果的にはそれが一番町民の皆さんの自信と誇りにつながるのではないかなと思っています。

お一人お一人の農家については、メロン農家もあれば、キャベツ農家もあれば、電照菊をつくっているところもおありになるわけですから、その利益がどうこうということで申し上げたのではないんですが、それなりに農業生産高が日本一ということをバックグラウンドにして、もっと付加価値の高い農業をやっていたければ、さらに農業者の皆さんに利益が戻ってくるだろうというふうに考えております。

よろしいでしょうか。

【質問者 A】

それと合併の関係なんですけど、合併しなくてもそういうことは同じことのようにも思えるんですけど、そういう希望というんですか、自慢になることということでは日本一という名前は確かに結構かなと思うんですけど。

【上野】

一つは、先ほどもちょっと申し上げましたけれども、農業の方は合併しないと日本一になれません。それから一つは、私はそういうことの結果、何が一番重要かというのは、やはり町の皆さんがお一人お一人ご自分のなさっている農業なり、自分のなさっているお仕事なり、この町の市民であることに誇りを持っ

ていただきたいというふうに思っているわけですね。それで申し上げているわけで、ですから、じゃあ、うちはキャベツばかり作っているけれどもちっとも儲からない、何が日本一の農業だとお考えになる方の中にはいらっしゃるかもしれません。だけれども、そうじゃなくて、その町を担っている自信と誇り、それが結果的にこの豊かな財政を支えていく。我々はみんな年をとっていきます。最後はいろいろお世話になります。そういうときに、やっぱり安心して、この町だったら年をとってもいいなという町と、こんな町は一刻も早く出ていきたいという町がございます。皆さんは恵まれているから余り出ていきたいと思わないでしょうけれども、私はずっと東京におりまして、6、7年前から静岡に住んでおりますけれども、この町だけには一生住みたくないなという町もございますよ。だから、それはやっぱり田原の人は恵まれているんですよ。やっぱりここにいたいでしょう。僕は、やっと最近それがわかるようになりました。やっぱり、私も東京で50年住んでいましたから、東京の町以外は知らなかったから、町ってこういうものだ、行政ってこういうものだ、福祉ってこういうものだと思っていたんですね。それが、やっぱりいろいろ引っ越してみるとその違いがよくわかるようになりました。だから、そういう意味では田原市は、私はとてもうらやましいと思います。

私がこんなことを言うと皆さん怒るかもしれませんが、皆さん恵まれているからやっぱりそういう飢え死の経験ないでしょう、みんな。大変なんですよ。本当に財政力指数がもう0.5以下の自治体なんかでは、小学校の給食問題で議会がもめたりするわけですよ。給食の費用の父兄負担がこんなに上がっている町であるわけですね、小さな自治体では。だから、そういうのは死活問題になってくるわけですね。でも、この町にはそういう事件は全然起こっていないですよ。だから、やはり、私はこの町の財政からいったら、中学校には確かソーラー発電もついているようですけれども、そういう町は滅多にないですよ。私は、この町というのは本当に豊かな町だなと思っています。よそ者がそんなことを言うと、何かうらやましがってばかりいて申しわけないですけれども。だから、やっぱりそういう自信と誇りをぜひお持ちくださいということでございます。

【司会】 ほかにお聞きしたいことはございませんか。

【質問者B】 よろしいですか。

湖西市のところでちょっとお触れになったと思うんですけれども、道州制の問題で、どういう方向性に行くんだろうかと。それから、道州制ということになりますと、今までの都道府県の役割、あるいは県庁所在都市という存在があるんですけれども、その辺も大きく変わってくるのではないかなと思うんですけれども、先生のご見解はいかがでしょう。

【上野】 大変申しわけないですけれども、道州制の専門家では余りないものですから大雑把なことしか申し上げられませんが、国会の論議とか専門家の意見などでは総論賛成各論反対が一番多いんですね。今。ですから当然、道州制の方がいいかしらんねというふうな国会議員さんが結構いらっしゃるんですね。ところが、現実に県知事さんとか、ある特定の地盤から立候補されている国会議員さんなんか聞くと、道州制なんかとんでもないと。おれの目の黒いうちは絶対許さんぞという方もいらっしゃるわけですね。

ただ、私は全体の今の行革の流れとこの国の将来的なあり方からいけば、道州制への流れは消えないと思っています。ですから、ちょっと時間はかかりますけれども、多分早くても10年後ぐらいかなというふうに考えているわけです。

ただ、道州制への流れはあるというふうに考えています。というのは、北海道や東京都は別ですけども、通常の県の果たす役割というのが、やはり非常にあいまいになってきているんです。というのは、分権型社会にすることによって、国が県に、県が市町村に権限を移譲したもの、事業を委譲したしたものというのは、実は県を飛ばしていきなり市町村へいくものもかなりあるわけですね。それが総体的に強くなれば、当然県の存在意義というのが問われます。それから、合併が繰り返されることによって政令市がふえた場合、県の役割は大幅に削減されます。例えば、私の友人で神奈川県庁に勤めている男がいますけれども、この男は昔、胸を張って「神奈川県で頑張る」と言ったんですけども、「何やってる」と言ったら、「神奈川県庁は神奈川県の西半分しかやっていませんから」と言うんですよ。川崎市が政令市です。横浜市も政令市です。人口は、川崎と横浜両方合わせると400万以上あるんですね。そうすると、残った神奈川県民約300万ちょっと。県庁は、その300万ちょっとだけやっていると。「横浜市と川崎市は何を言っても言うことをきかないから」と言うんですよ。となると、県の役割って何だということなんです。市町村の調整役かということになって、神奈川県の人は県庁は要らないっていうんですよ。要するに、政令市がぼん、ぼんとあればいいじゃないかというふうな考え方ですね。そうすると、県の役割が問われてきますので、もちろん予算の問題とか執行の問題がありますけれども、長い目で見れば道州制への移行は十分にあると思っています。ですから、そういったときにきらりと光る、この田原が残ることを期待して申し上げているわけですけども、いいでしょうか。

すみません、余り専門的なことはちょっと知らないことも多いものですから十分じゃないと思います。

【司会】 ほかにございませんか。

ありがとうございました。

それでは、予定した時間もまいりましたので、以上で質疑を終了させていただきます。

本日は、大変すばらしいお話をお聞かせいただき有意義な講演会を開催できましたことを、上野先生を初め会場の皆様方に厚くお礼申し上げます。

なお、上野先生には大変お仕事でございますが、健康には十分ご留意され、ますますのご活躍を心よりお祈り申し上げます。また、今後とも本市発展のためご指導賜りますようお願い申し上げます。

それでは、上野先生にご退場いただきます。皆様、いま一度盛大な拍手をお願いいたします。（拍手）

（講師退場）

【司会】 会場の皆様、どうもありがとうございました。